

2021年10月16日

Explore Ibaraki (茨木探訪)報告

野外活動分科会

10月16日(土) Explore Ibaraki (茨木探訪)を実施しました。今回は「茨木神社」→「佐介樋」→「川端康成資料館」→「丸また・伏見屋」→「田中町天満宮」→「安威川・茨木川合流の碑」→「総持寺」の3.8kmを徒歩で巡る茨木北部コースです。

当日は「今年最後の夏日」との予報に違わず、少々汗ばむ気温でしたが、吹く風は爽やかで、絶好の探訪日和。それになんといっても20人のIIN会員の参加があり、久しぶりに画面越しではなく直に会うことができたのが大きな喜びでした。また、野外活動分科会の各地点の英語での説明を、楽しんで頂けたのも大変嬉しいことでした。身近過ぎて見過ごしていた茨木の良いところに気づいて頂けたのでは?と期待しています。

以下に茨木探訪の詳細を報告します。

9:00 am 茨木神社集合。

当日は「黒井の清水大茶会」(規模縮小開催・野点中止)の儀式、鷹匠による実演が予定されていました。出番を待つ鷹の好奇心いっぱいの表情がとても可愛かったです。茨木神社の立派な鳥居や門を眺めながら、奥の方に行くと北摂三名水の一つである「黒井の清水」の井戸があります。豊臣秀吉がこよなく愛し、茶会の度に取り寄せた水で、その故事に因んで「黒井の清水大茶会」が毎年行われています。従来は琴の演奏などのある趣深い野点のようです。茨木のおいしい水は酒造り、豆腐作りにも用いられています。



次は桜公園内の佐介樋跡へ。

ここで佐介(佐助)こと古田織部の説明。戦国時代、古田織部は武士として活躍する一方で芸術家としての才能も発揮し、陶芸の「織部焼」、茶道の「織部流」、「作庭」等に名を残しました。古田織部が主人公の歴史漫画「へうげもの」は戦いに明け暮れながら、美や数奇を求めることで心身のバランスを保った戦国時代の武士の姿を描いています。織部焼を今すぐ見たい方は茨木小学校に行ってみてください。学校の塀には織部焼の「茨木小学校」の文字が。ついでながらその正門は茨木城の復元された櫓門です。



佐介樋のすぐ前は川端康成記念館。

ノーベル賞作家の書斎、原稿、ノーベル賞授賞式の写真など、川端康成のすべてが詰まっています。幼くして父母を亡くした川端康成は豊川に住む祖父母に育てられました。幼少のころから読書を楽しむ、庭の木斛(もっこく)の木の枝に腰かけて読書に励んだそうです。サイデンステッカーの翻訳のおかげで「雪国」「千羽鶴」「古都」などにみられる日本人の繊細な心の機微が、世界の知るところとなり、ノーベル賞につながりました。そのため川端康成はノーベル賞授賞式にサイデンステッカーの同伴を求め、賞金の半分を彼に渡したそうです。



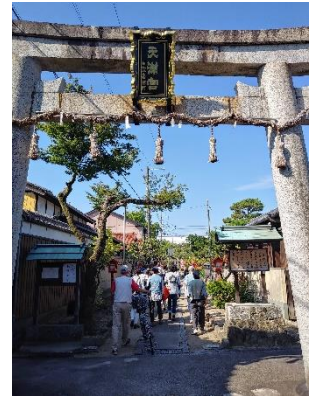
次は丸またトンネルと老舗伏見屋。

明治時代の鉄道敷設当時建造の丸または、京都の南禅寺の水路閣と同じ、ねじりようにらせんに煉瓦を積んで強度を高めている「ねじりまんぼ」と呼ばれるトンネルです。今なお現役の丸またはその上をJRが、下を歩行者や自転車がひっきりなしに通ります。丸またのすぐ近くには、こんにゃく豆腐の老舗伏見屋があります。伏見屋では100mほどの深い井戸から水を汲み、伝統的製法で豆腐を作っています。丸また側の売り場では、常時お買い得の商品が用意されているという「お得情報」も紹介されました。



菅原道真所縁の田中町天満宮。

こんなところに？と思うような住宅街に長い参道を持つ田中町天満宮があります。田中町は道真が左遷で大宰府に赴くときに滞在したところです。京に未練のある道真ですが、田中町の人たちは政界の権力争いには関わりたくなく、雄鶏を早々に鳴かせて、道真一行を集落から追い出したという逸話があります。道真の死後次々起こった災難を、たたりと恐れ、道真の怒りを鎮めるべく神社をここに建立しました。小さな天満宮ですが天満宮必須の「梅」「牛の像」もちゃんと置かれています。



桜通り緑地公園を通過して茨木川安威川合流の碑へ。

茨木別院前が水につかっているショッキングな写真で説明が始まりました。1935年の洪水の時の写真です。茨木川は天井川で何度も洪水を起こしたそうです。市民の度重なる陳情で、流れを落ち着かせるため茨木川を安威川に合流させる工事が1939年より始まりました。今では元茨木川は緑あふれる公園になっています。合流地点付近の土手には山桜が植えられ、南に生駒山、北に竜王山を仰ぐことができます。ソメイヨシノが咲き終わった後に花見を楽しめる穴場です。



11:40am いよいよゴールの総持寺へ。

総持寺は「亀に乗った本尊千手観音」で有名です。総持寺開基の藤原山蔭の父が、漁師が捕まえた大亀を、逃がしてやったところ、翌日、水難にあった山蔭をまるで「亀の恩返し」のようにその亀が甲羅に乗せて現れたそうです。亀に助けられた山蔭が謝恩のため観音像を建てたのが総持寺の起源です。本尊を彫るにあたり、山蔭は1000日間仏師に料理を供え、それが包丁道の元となりました。毎年、総持寺開山堂で調理師が烏帽子、直垂の正装で包丁さばきを披露する包丁式が行われます。戦国時代に火災にあいましたが再建され今日に至っています。



ほぼ予定通り12:00過ぎに「茨木探訪」完歩しました。

「歩ける距離はこれが限界」という声もありましたが「次は茨木市の南コースを計画中」という分科会代表の言葉に「楽しみに待ってます」という反応もあり、まだまだ、余力を保持されているようです。次回、より多くの会員の皆様と、小さな発見を求めて「茨木探訪」第2弾を楽しめれば幸いです。皆さま、お疲れさまでした。